
1

a

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

1

【著者名】

N4984W

【作者名】

a

【あらすじ】

To Drunk To Write

今日の精神科の待合室の酷さといつたらなかつた。隅のソファに腰掛けた、黒いTシャツ黒い短パン、といつ見るからに異様な風采の小男が裏声で何事か喋つていた。独りで。また、青い作業着姿の初老の男が工具片手に待合室へ頻々と出入りしているのは、どうやら音響設備が故障している様子で、普段は氣にも留めないクラシック音楽さえ流れない始末、それだから小男のぎやあ、とか、ひやあ、といつた呻きとも何ともそれぬ碎かれた日本語が否応なく耳に入つて来る。私は見てはいけないものを見てしまつたとき特有の、ある種の戸惑いを覚えた。そしてこのまま抗不安薬を服み続けていたら、いずれは我が身もかくの如き末路を辿るのかも知れないといつたうら寂しい展望が予見された。

時刻は既に十七時を回つてゐる。予約していたのはその時間だが、精神科に限らず病院で診療時間がずれ込むのは周知のことだ、だからその間、小男の創出する奇矯な新言語などに耳を傾けず、往来で煙草でも吸つていればいいものだ。数分前、受付嬢からも「お呼びだし出来るのは一時間ほど後になりそうですねえ……」と申し訳なさそうに言い渡された。が、私はそうしなかつた。そう出来ない理由、といふか確信があつた。仮に私が五分ほど席を外したとしたら、その僅か五分の間に、私の名前が呼び出されるのだろうという確信があつた。絶対に。だからこの場から逃げ出すことさえ叶わない。小男の拳措に触発されたものか、私自身も徐々に落ち着きを失つていつた。用もないのに携帯電話を開閉し、周囲の他の患者に視線を走らせたり、壁際に掛けてある週刊誌を手に取り散漫な心持で眺めたりした。

休日。朝の八時。冷蔵庫から缶ビールを取り出して呑む。最近、ウオッカ、ウイスキー、ジン、ラム、日本酒の類いは控えている（焼酎はもともと呑まない。臭いが生理的に駄目だ）。これらの酒は強すぎて精神安定剤とあまり相性がよくないし、それにこの頃は彼女からも禁酒するように申し渡されている。だからビールで我慢する。勿論、安物だ。駅前のスーパー『まなまーと』に行けば130円前後で手に入る。万引きは駄目だ。私はちゃんと金を払う。これが大人の生活だ。

ビールを飲んで屁をこいたら失敗してしまった。失敗、といふか、腸の中身が出てしまったのだ。それも下痢便だ。薬と安物の酒と安物の刺身ばかり食べてるからだろう、最近はずっと下痢腹を抱えている。これが大人の生活だ。便所に駆け込んで確認したが、手遅れだつた。ボクサー・パンツの尻のところに無残な黒い染みが出来ていた。消化し切れなかつた食べ物の残骸のようなものも付着している。特にボクサー・パンツに愛着はない私でもこれは悲しい。朝から下痢便に汚染された下着を洗うのは本当に悲しい。なんていうか、その、分かるだろう？ これ以上、今朝のことは書きたくない。それからのこととは想像力というのを使って欲しい。これは人間なら誰にも備わっているらしい。私には無いが。人間じゃないのかも知れない。

他の場所のことは知らないが私の住んでいる練馬区にはいま暗雲が立ち込めていて昼なお暗い。雨も降つたりやんたりを繰り返している。こういう日は外に出たくない。傘を差して自転車を漕ぐのが億劫だからだ。世に「若いうちの苦労は買ってでも……」というが、

私は苦労をしたくない方だ。選択を迫られたとき、常に楽な道を選んできた。これがその結果だ。路上で無縁仏になる覚悟は出来ている。惜しむほどの人生ではなかつた。私が死んだ後に核戦争が起ころといい。生きているうちでも構わないが。

仕事から帰ってきてまずビール。そして少し気の利いた本を読んで音楽を聴いて、気がつくと眠りについてしまう。先日計算してみたら十時間くらい寝ているようだ。夢の中で私は仕事をしている。へマなミスを犯して叱責される類いの夢だ。そして隣されて目が覚めて仕事へ行く。こんなことがもう何ヶ月も続いている。このままでは駄目だ。なんというか凄く駄目だ。ノイローゼ人間として完成してしまっている。このままでは仕事に取り殺されてしまう。

今まで仕事に取り殺されないために様々なカーデを切つてきた。酒に煙草に小説に音楽に旅行にテレビにゲームにエロ本、果ては精神安定剤にまで手を染めた。しかし私の精神衛生上に何ら好影響を及ぼさなかつた。だから違法薬物を喫しようと思う。違法薬物の持つ得体の知れない力でこのノイローゼから脱却だ。

私の中学時代の同窓生A君が現在ボーアイズ・バーなるものに就業している。このボーアイズ・バーが通常のバーとどう異なるのかはこの際知つことではない。そのボーアイズ・バーを経営する男が密に覚醒剤いわゆるシャブを扱つてているという。私はA君と連絡を取り電話口で拌み倒して何とかシャブなるものを融通してはくれないかと哀願泣訴した。私の幾度にも及ぶ電話と粘着質な口吻に辟易したA君が屈してようやく約が交わされようとしたときにこれが世の習いというかアクシデントが起こつた。違法薬物と絶望した男の立場に理解の無い性悪女が警察へ連絡してしまつたがために経営者の男が逮捕されA君との話が潰えてしまった。この性悪女とは経営者の男の妹だつたそうだ。家族なんだからそこはもつとさあお兄さんを擁護してやるべきなんじやないかなあといふか俺のシャブ、希望と救済の光に包まれたシャブ様をどうしてくれるんだよこのクソアマが。

先日、彼女と日暮里で勉強会をする。といつてもドートールでコーヒーを飲みまくりながら、僕は小説を読んでいただけ。彼女はカラーコーディネーター資格取得のためのテキストを読む。僕は珍しくシラフ。代わりにカフェインと薬を多量摂取する。デート中にショートトリップするバカ野郎。まあ彼女も薬やつてるから文句は言わない。スカートの中に手を突っ込んだら殴られた。なんて乱暴な女だ。女は乱暴だ。男の纖細さを見習うがいい。僕を見よ。纖細すぎて未だにまともな職業にも就けないのだ。纖細すぎて毎日アルコール漬けなのだ。纖細すぎて友達から「死んじまえ！」と罵倒されるのだ。今は纖細な男が橋の下やゴミ捨て場に追いやられる時代だ。社会から冷笑的につまはじかにされるのだ。悲しい。僕は悲しい。あはは。

後、カラオケで乳縁り合っていたら急に電話あり。店員から「そのような行為は止めてください」と注意される。なんというか、やっぱりカラオケって監視カメラとかあるんだなと思った。

今日は仕事で日大光が丘病院へ行く。入居者を連れて介護タクシーに乗ること十分ほどで到着。天気はあいにくの雨。上着越しにもとても寒い。

日大光が丘病院には僕も過去に来たことがある。救急車で。あれは何だったかな、車に轢かれたときだったか、意識不明になつて前歯を折ったときだったか。救急車には何度も乗つているのでよく憶えていない。

大きな総合病院なので人待ちが多く、待合時間が長い。その間に車椅子の入居者と話しつつ、村上春樹の『アフターダーク』を読み終える。つまらなくはないが格別面白いとも思わない。複数の男女が夜の時間を生きる話だった。間違いがなければ。

名前を呼ばれる。診察は十分ほどで終了。医師と今後の診察、通院予定について話す。少し重要な話。こういう話を僕のようなチンピラに任せることなんて、上司は何を考えているんだろう。まあいいけどね。後、処方箋を貰い、受診料を支払う。介護タクシーを携帯電話で呼んで施設に帰る。後、処方箋を薬に変える。

最近、自分の彼女から「死にたい」「もう自殺する」と云々というメールおよび電話が相次ぐ。僕はだいぶ気をつけている。これが普通の女の場合であれば笑つて聞き流せるが、僕の彼女は精神病院に五ヶ月以上入院していた筋金入りの自殺志願者だ。不安にもなる。僕は「とりあえず本を読んだら?」とアドバイスしているのだが、

彼女曰く「本なんか読めない。本を読むにも才能が要る」との「」
そうか。本を読むには才能が要るのか。知らなかつた。

以下は倉田百三の著『愛と認識との出発』（岩波文庫）からの抜粋。
> block quote < > p < たとい充実せぬはかない気分で冷
たい境地をうろついていても、譬えば浮き草の葉ばかり搖いで根の
ない如く、吹けば消え散る心の靄、こんな生活をして、果ては恐し
い倦怠のみが訪れても私は死にたくない。かかる生が續けば續くほ
ど、益々運命を開拓して心の隈々まで沁み込むような生が得たい。
私はあくまで生きたい。 > / p < > / block quote < ぼろ
雑巾になつても生き抜く。感受性も想像力も抹殺して、最後まで生
きる。彼女にはそれが分かつてない。僕も分かつてないけれど。何
故なら死にたいのは俺の方だからだ。

曇。午前七時頃に起床。午前中はビールを呑んで呆けている。午後は練馬高野台駅前のブック・オフで漫画を眺めて時間を潰す。自分は本当におしまいだと思う。終つてゐる。何もかも。小説を幾冊か購入。後、図書館へ行き『神様のいない日本シリーズ』返却、新たに穂村弘『によじつ記』借りる。日記。なんだろうと思う。エッセイとはまた異なる面白みがある。と思う。少し笑う。少しほんわかとした気分になる。僕もこんな風に生きたかった。でも無理だった。

私の職場、老人ホームに住む某老女の口癖は、「何かすることはないのつ！」だ。この老人が、精神病院を出てから此方に越してきた現役の癲癇病者であることを差し引いても、この言葉は哀しい。七十年、八十年と生きてきた結果が、「何かすることはないのつ！」。僕を含めスタッフは様々なレクリエーションを提案するが、「こんなのがつまらないわつ！」と何もかも一蹴してしまう。そして自分の居室に引きこもる。自分の将来を見ているようだ。少し言い方は悪いだろうがこれがたいていの人生の「末路」なんだろう。何もすることができない。辛いだけの時間が流れしていく。それで死ぬ。あれもつまらない、これもつまらない、こんなはずではなかつたのに、とか何とか。生きるつて悲惨だなあ。人の一生なんて悪い夢みたいだなあ。はやく醒めてくれないかなあ。

『によじつ記』『によじつ記』には、ときどき「天使」という謎の人物（？）が、筆者であるところの穂村さんの日記に現れて生活に少しだけ干渉する。日記にさえ嘘を書くのは人間としてどうなのか、とも思えるが、もつそりでもしなければ生きていけないのか、とい

う哀しさがある。バカ正直に日記を書いたり、現実を見たりしなくてもいいんだな、とも思う。きっと。もう現実逃避しかないんだ。他にどうしろというのか？ どうしろっていつんだよ？ さしあたり死ねばいいのだろうか？

酒を呑みながりついだ書いていたら、もうこんな時間だ。おやすみ。また明日。

休日。快晴。だといつのに本屋と喫茶店くらいにしか行かない。いつも同じコースをぐるぐる回る。家 本屋 コンビニ 喫茶店 スーパー 家。まるで何かの罰のように、休日が来るたびにぐるぐる回っている。ぐるぐる。

駄目な大人になつたな、と思う。僕以外のみんなは、休日になるとどこへ行つているんだろう。パチンコ、風俗店、精神病院、刑務所。果物ナイフを懷中して上司の家の周りをうろついたり、あるいは自宅で残つた仕事の整理でもしているのだろうか（僕もたまにそういうことをする。もちろん後者のことだが）。まったく、見当もつかない。

職場の同僚は海外旅行へ行つたそうだ。他にも温泉だとか、スキーだとか。旅行、か。

以前、何の目当てもなく電車に乗つて知らない駅で降りるようなことをしていた。旅行気分を味わおうと思つたからだ。しかし何の意味もなかつた。知らない本屋に寄つて、知らないコンビニに入っただけだつた。知らない喫茶店に入つて不味いコーヒーを飲まされただけだつた。虚しかつた。ひたすら虚しかつた。家に帰つて少し涙ぐんだ。場所を移しただけで今より幸せになれると思つたのが浅はかだつた。以上の経験から、旅行をするような連中はきっと頭がおかしいんだと確信した。

昨日、とつぜん迷惑メールが来るよになつたので、携帯電話のア

ドレスを変えた。他、忘年会の誘いが二件。クリスマスは彼女と過ごす予定。僕みたいな、見ているだけで殴りつけたくなるような、腐り果てた生物でも、いちおう年末は忙しい。クリスマスはホテルを予約した。後はもちろんセックスだ。彼女に「後はもちろんセックスでしょ？」と尋ねたら、「あなたって本当に下品ですね」と云われた。

二十五日は午後七時半に仕事を終えてすぐに石神井公園駅で電車に飛び乗り、一時間半ほどかけて千葉の天王台駅まで行き彼女に落ち合つ。車内にて『寺山修司青春歌集』読み終える。「無名にて死なば星らにまぎれんか輝く空の生贋として」「夕焼の空に言葉を探すよりきみに帰らん工場沿いに」。到着して彼女から出会いがしらに「遅えよ!」と言われ、みぞおちを殴られる。こういう即物的な暴力に訴える女は詩情を解さないと思った。酒を呑んで予約していたホテルにチェックインして酒を呑んで夜が更けるまで性交して酒を呑んで寝た。お互いに抗鬱剤を服んでケミカル・セックス、今日も薬の副作用のせいで射精せず。彼女から「本当にあんたは不能だよね!」と言われる。傷つく。でもクリスマスプレゼント貰う。中身は、内緒。

二十六日は僕は休み、彼女は仕事だったので午前九時頃に駅で別れて僕はそのまま池袋へ行つてブックオフに入る。珍しい本を105円で買い漁る。奥泉光の『バナールな現象』は何年も前から捜しているが今回も発見できず。代わりというか同じ著者の『モーダルな事象』を購入。奥泉さんの本は高い。他、丸谷才一のエッセイ二冊、川端康成の『花のワルツ』。今回もやはり丸山健一の『争いの樹の下で(下)』『虹よ、冒流の虹よ(下)』ともに見当たらず。両方も上巻だけ持つている。下巻だけ見つからない。畜生め。僕がツイてないだけなのか。帰りに喫茶店で本を読んでから拙宅へ。酒を呑んで寝る。

坂井君から電話。「死にたい。一緒に死んでくれ。」との由。後、

彼女から電話。「死にたい。一緒に死んで。」との由。何故なのか知らないが僕の周りには僕と心中したい人が多い。僕に股を開く女はほとんど皆無なのに。世の中どうなつてんの？順序が違うだろ。自殺する前に僕に股を、じゃねえや心を開くべきだぜ。胸襟開いて語り合つべきだぜ。

まあ僕は面倒だからそんなことしないけど。

これも順序を間違つていると思うんです。こんな世の中ですから、「死にたい。」とストレートに言つても（書いても）、「勝手に死ね。」と返されるのが落ちです。それよりも、例えば坂井君の場合、「今、自分の働いている会社が倒産しかかっています。そのうえ弟が働きません。」とでも書いた方が世間の同情を集められると思います。世間の同情を集めたいのなら。僕はどうでもいいんですけどね。このブログも凄くプライベートなものですし。そもそも誰も読んでないですし。僕はとりあえず彼や彼女に「酒でも呑んだら？」といい加減なアドバイスしてお茶を濁しています。人に偉そうにアドバイスしようなんて考えたくもありません。馬鹿馬鹿しい。だいたい僕は身銭を切つて何十万も金を突っ込んで本を読んで、それらしい言葉を蒐集して、ようやく生きながらえているんです。それをタダで、簡単に「秘密」を教えるほど、僕は優しくありません。誰だってそうじゃないですか？ たぶん。

今日も酒を呑んでハッピーな気分。あとは本を読んで寝るだけです。今日も幸か不幸か生きながらえた！ 年末年始も仕事だ！ 死にてえ！ あつ。

今年は本当に不幸な一年だった。骨折するし、パソコンは壊れるし、新しい職場は地獄だし、おまけに上司から馘首するぞと恫喝されし、彼女には殴られるし、腹は出るし、髪は薄くなる一方だし、金はないし……世間のほうでも、地震、津波、原発、と……。ああ、すがすがしいほど不幸だ。頭が痛くなるような思い出ばかりだ。

いや、よく考えてみると昨年も、その前の年も同様に不幸だったような気がする。何故なんだ。もつ既に充分な社会的な制裁を受けているではないか。これから先、生きていけるのだろうか。自信がなくなってきた。

年末年始は仕事が入っている。ああ。もう本当に厭だ。どこか人目に付かないところへ逃げ出したい。そこで十年くらい隠棲したい。酒でも呑みながら。

職場の同僚たちは一様に幸せそうな顔をしている。何がそんなに楽しいのか。

さつぱり気分の晴れない年越しになりそうだ。これが今年最後の更新。やることないので壁と話でもします。皆さん、来年も良いお年を。

新年明けましておめでとうございます。僕は元日も仕事でしたが。

平成二十四年の一月一日はあまりいいことがありませんでした。僕の職場、老人ホームで朝食後に嘔吐された入居者の方を近くの総合病院へお連れして（元日でも病院つてやつてるんですね。当たり前かもしだれますが）、腹部のレントゲンも撮つて診察してもらつて医師の口から出た言葉は「原因はよく分からないです。水分を多めに摂取して様子観察してください」つてお前この野郎ナメてんのか。そんな診察なら俺でも出来るんだよ馬鹿野郎。正月料金なんか二千円以上ふんだくられた（我が老人ホームの入居者の方々はいろいろ保険に加入されているので普通は五百円とかそんなもの）。こんだけぶつたくつて、この診察結果は何事であろうか。案の定、その入居者の方は昼食後も嘔吐されました。「家族に連絡、嘔吐処理は僕（汚物処理、消毒、着替え、エトセトラ）。本当にふざけるのもいい加減にしてくださいよ。一月一日に吐瀉物の処理をする僕の身にもなつてくださいよお医者様この野郎。適当な言葉を弄して老人から金を巻き上げるんじゃない。そして僕の仕事を増やすんじゃない。残業手当なんか出ないんだぞ。こちとらサービス残業なんだぞ。金返せ」「ハー！」

ま、まあ、あんまり気分のいい元日ではありませんでしたが、本日（一月一日）は休日だったので池袋へ行きました。ブックオフに行つたら高橋源一郎さんとリチャード・ブローティガンの珍しい本が一〇五円で置いてあつたので購入。やっぱり今年はいい年かもな、と思わないでもない。

彼女から年賀状が来る。嬉しい。また、暇だったので、舞城王太郎の『熊の場所』を再読。

眠い。

メッセージ性のない日記で申し訳ありませんが、特に目新しい事件や、新年の決意とかは無いです。やってみたいことも特に思いつきません。今年も例年と同じように過ぎていくでしょう。たぶん。二十四歳。中学生や高校生から見れば立派な「オッサン」かも知れませんが、別に十四歳の頃と気分は変わりませんよ？ イジメはあるし、鬱陶しい人（顔に煙草の火を押し付けてやりたい人）もいる。僕の友人の坂井君は「この人生には面白いことなんか何一つ無い」と悟つて自殺を決意したそうです。学校ってのは本当に「縮小された社会」なんだなあ、と実感するこの頃です。まあ、今年も何も考へないで生きるか！

散々な年明けだ。

昨日は千葉神社まで彼女と連れ立つて初詣に行つて、お御籤を引いたら小吉で（彼女は末吉だった）、その後に入つたカラオケ屋で彼女と喧嘩になつて駅改札前で物別れして、僕は冷たい心持で電車に乗つて居眠りして、そうして間違つた電車に乗つたことに気づいたのは一時間半ほど後で、電車を変えて漸く東京駅へ着いて乗り換えて池袋に出たはいいけれどももう終電を逃していたので仕方無く池袋の漫画喫茶に泊ることにして、しかし寒いし狭い上に全身を虫が這う幻覚が見えだしたせいで身体中をかきむしつて全く眠れなくて、翌朝は寝不足で痛む頭をふらふらさせながらそのまま職場へ行つて、さつき帰つて来た。ふらふらする。あたま。今年一年の凶兆を暗示するような一日間だつた。

寝不足のせいなのか、それとも飲み過ぎた珈琲のせいなのか神経過敏になつてしまつて誰が見ても今日の僕は拳動不審で、一拳手一投足が普段の自分とは些か狂つて居て、それを客観的に眺めている自分が居て、そいつが俺もう死にたい、と呻いた。ツキにも見放され彼女にも見放され職場でも拳動不審の人間が生きていく術は無いようと思われた。携帯電話を開いてみるが彼女からメールの返信は無い。消えて無くなりたかった。自分の様な愚かしい人間が生きて居ても仕方が無い、よし死のうと思つた。でも怖かつたから止した。毎日を明るく楽しく過ごしたいだけなのに用意されていたのはこの末路。酷いじやねえか。なあ。

今も未だ神経過敏状態で心拍数は上がり続けていて僕の拳動は自分

の部屋の中ではますます怪しくなつていぐ。ひたすら心が落ち着かないから酒を呑んで煙草を吸つて酒を呑んで煙草を吸つて酒を呑んで煙草を吸つて、それでも未だざらざらとした胸騒ぎが継続中でいい加減に自分自身に腹が立つて來た。若造よ、何を慌てることがある。人生は長い。なんたらかんたら。落ち着かない。全然落ち着かない。手近にあるものを何でもいいから破壊し尽くしてしまいたい衝動に駆られる。

これでは、完全に病人だ。
廃人。

このままでは大袈裟に云えば明日の朝日を挙める自信も無い。とにかく酒だ。何も考えないようにして酒を呑んで寝てしまおう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4984w/>

1

2012年1月8日20時51分発行